

## 研究ノート

# ボルネオ・イバン人のリーダーシップに関する一考察

西 島 薫\*

## Reconsidering Leadership of the Iban People in Borneo

NISHIJIMA Kaoru\*

The leadership of the Iban people, who mostly live in Borneo, has been one of the most controversial topics in Iban studies. However, most of the previous studies on the leadership of Ibans consider the “Iban society” as a closed coherent system. This paper aims to reconsider the leadership of the Iban by firstly overviewing several important ethnographies of Borneo from Austronesian comparative studies. The leadership of the Iban people in Borneo can be explained from the perspective of “precedence.” Secondly, several significant previous studies related to the leadership of Iban are reviewed that tend to essentialize the “traditional Iban society” based on the consideration that either the Iban society is a coherent whole or that some Iban people are more traditional than the others. To overcome the problem of essentialism, it is presupposed that contradictory norms or inconsistent practices can coexist in “society.” It is also necessary to consider the leadership of Iban people in the historical context, which, in long-settled areas, leaned towards “precedentialism” because of the existing piracy and close relations with Malay leaders. In contrast, the Iban leadership of pioneers tends to be “egalitarianism” mainly because of the policies of the colonial government, sporadic warfare, and increasing trade. The conclusions suggest that on the basis of particular historical contexts, Iban people could be compared to people living in insular Southeast Asia, who expanded during the 18<sup>th</sup> and 19<sup>th</sup> centuries.

### 1. はじめに

東南アジア島嶼部では、中部フローレスのリセ首長国、ティモール南岸のナブアサ首長国や中部スラウェシのサダン・トラジャの戦争首長など、暴力的手段によって急速に拡大していった人々が存在する。このような地域では、戦争・交易における実力によりリーダーシップを獲

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2015年2月3日受付, 2015年7月31日受理

得する人々が局所的に出現するといった特異的なリーダーシップの地域的分布がみられる [杉島 2014b; 山下 1988; Volkman 1985]. しかし、これらの人々に関しては、個々別々に研究がおこなわれており、杉島の指摘するように、東南アジア島嶼部における暴力的リーダーシップの台頭と歴史的経緯に関しては、さらなる比較研究の可能性はある [杉島 2014b]. 本稿では、19 世紀から 20 世紀にかけて、暴力的リーダーシップが伸長したボルネオ西部のイバン人たちのリーダーシップを取り上げる。イバン人たちの暴力的リーダーシップを、今後の比較研究のひとつの事例として提示する。

本稿の目的は、一次資料や先行研究を整理・分析することで、イバン人のリーダーシップと歴史的経緯の関係について新たな理解を付け加えることにある。イバン人のリーダーシップに関連する研究は既に数多くの蓄積があり、本稿は新たなデータの提示を目的とするものではない。しかし、以下で指摘するとおり多くの研究はイバン社会を内閉的な体系として本質主義的に描く傾向にあった。<sup>1)</sup> そのため、歴史的に多様な変化をみせたイバン人のリーダーシップは、十分に歴史的経緯と関連付けて議論されてきたとは言い難い。地域差や歴史的経緯に留意しつつイバン人のリーダーシップについての先行研究を整理・分析することは、本質主義的な議論を再検討するうえで必要不可欠である。また、イバン人に関する一次資料や先行研究は、サラワク王国時代から現在まで多くの蓄積があり、それらを他地域との比較可能なかたちで再整理する必要もある。本稿では、イバン人のリーダーシップが、ブルネイ王国の衰退、後述のサラワク王国の統治や交易の拡大などの歴史的経緯の中で、多様に変化していったことを示す。

イバン人はマレーシア・サラワク州の西部を中心に居住する。言語的には、オーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語派のイバン語を話す。多くのイバン人は、他のボルネオの人々同様、現在までロングハウスと呼ばれる高床式長屋に居住している。イバン人たちは、16 世紀頃に現在のインドネシア・西カリマンタン州のカプアス川流域からマレーシア・サラワク州の沿岸部へと移住してきた。さらに、19 世紀より北部へ拡大し、現在ではマレーシア・サラワク州の人口の約 3 分の 1 にあたる約 60 万人がイバン人である。19 世紀までボルネオ西部はブルネイ王国の統治下にあったが、1841 年にイギリス人探検家のジェームズ・ブルックがボルネオ西部のサラワク川流域にサラワク王国を建国する。その後、サラワク王国は北部に向かって急速に領土を拡大し、1946 年までボルネオ西部は 3 代にわたってブルック家の統治下にあった。

イバン人のリーダーシップに関しては、イバン人たちが戦闘を繰り返していた 19 世紀から 20 世紀初頭に研究が集中している。そのため、本稿でも 19 世紀から 20 世紀初頭までのイバン人たちを対象とする。また、地域についてもサリバス・スクラン川流域およびバレー川流域

---

1) 本質主義とその問題点については杉島 [2001] を参照した。

に研究が集中している。本稿では、長期定住地としてサリバス・スクラン川流域を、開拓地としてはバレー川流域のイバン人たちを中心的に扱う（図 1）。

## 2. 本稿の研究枠組と視点

### 2.1 本稿の研究枠組

以下で検討するように、イバン人に関する民族誌は、「イバン社会」なるものを内閉的な体系として描く本質主義的な傾向にあった。本質主義的な議論を再検討するにあたり、本稿では「複ゲーム状況」という概念を用いる。複ゲーム状況とは、両立しえない規範が併存しつつ同時並行的に作用する状況であると要約できる [杉島 2014a: 10]。複ゲーム状況は、人々の社会的事象を有機的に結び付けて「社会」や「文化」を体系として描いてきた本質主義に対する批判的含意をもつ概念であるといえる [杉島 2008, 2014a]。さらに、複ゲーム状況は、両立しえない規範は、外的な諸要因と密接に結び付いていることに着目する。複ゲーム状況の概念群では、複ゲーム状況の背景にあり、出自や経緯の異なる規範を成立させる外的な要因は「ゲーム外状況」と呼ばれる [杉島 2014a: 10-11]。また、一次資料や先行研究を複ゲーム状況の概念を投入しつつ読み直すことで、歴史人類学的研究をおこなうことも可能である [杉島

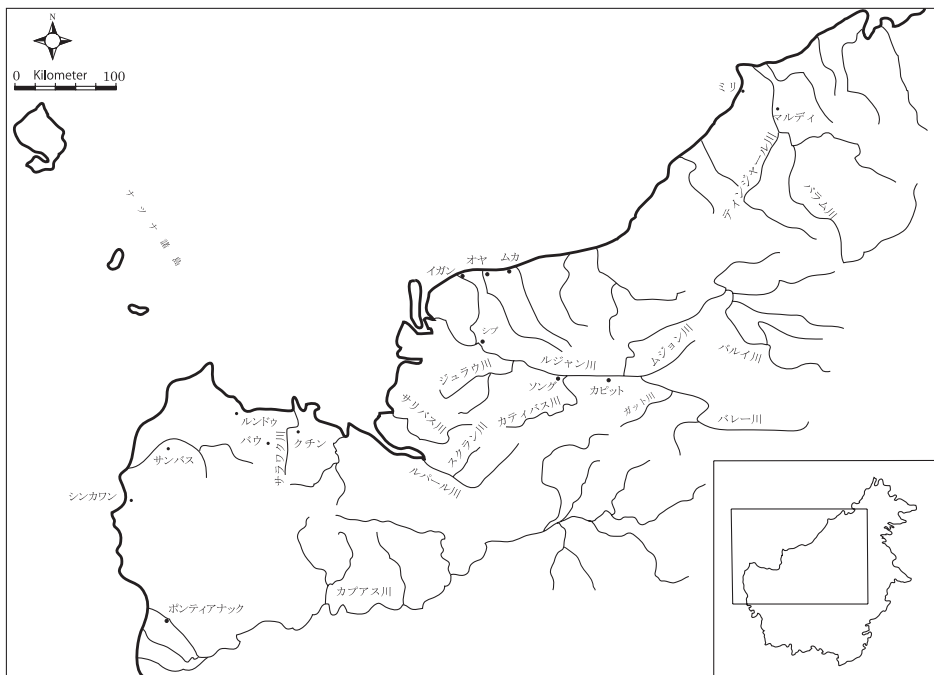


図 1 ボルネオ西部概略図

2010]. 他のボルネオの人々と比較しても、イバン人に関する先行研究および一次資料は膨大であり、その中には相互に矛盾する記述も含まれる。相反する規範が同時並行的に作用していたという視点のもとで、一次資料や先行研究の記述を読み直すことで、イバン人のリーダーシップに対する、より一貫した説明が可能となる。

## 2.2 本稿の視点

複ゲーム状況という研究枠組に加え、周辺地域の人々との比較からイバン人たちの特異性を指摘するうえで、比較研究の視点が必要である。本稿では、比較研究の視点枠組として 1980 年代から 1990 年代にかけてオーストラリア国立大学を中心に学際的におこなわれてきたオーストロネシア語族比較研究枠組を用いる。オーストロネシア語族比較研究では、さまざまな分析概念を導入しつつ各オーストロネシア語族社会間の比較研究がおこなわれてきた。その中でも特に重要な比較の視点として提起されたのが、「起源」(origin)と「序列」(precedence)の概念である [Fox and Sather 2006; Vischer 2009].

オーストロネシア語族社会で「起源」とみなされるものはさまざまであるが、多くの場合は神話上の神々、起源の地、土地の先住者などである。オーストロネシア語族の特徴は、「起源」とみなされるものが、「幹・根本・源」などを意味する「*puqun*」(再構築形)を語源にもつ言葉によって呼ばれることである [Fox 2006a: 6]. オーストロネシア語族社会では、系譜、移住史などの口承伝承や神話によって語られる「起源」との近接性が、さまざまな権威の主張を正当化し人々の関係を序列化する [Fox 1995: 37-51; Fox and Sather 2006].

オーストロネシア語族社会のもうひとつの特徴は、序列関係がいくつかの定型的な隠喩表現を用いて概念化されることである。たとえば、序列は、「根幹/枝先」といった植物隠喩、「親/子」、「年長/年少」といった親族隠喩、「起源の地」からの移動の歴史などの空間概念を用いて概念化され表現される。非対称的な隠喩表現では、片方が他方に対して優位な関係にある。たとえば、植物隠喩においては、「根幹」が「枝先」に対して優位な立場にある。親族隠喩においても「親/年長」は「子/年少」に対して優位にある場合が多い。また、空間概念を用いた表現では、「起源の地」からの連続性を主張するものが序列において優位にあるとされる [Fox 1995: 32-33, 2006b: 12-13].

本稿では、上述の隠喩で表現されるようなさまざまな「起源」との関係によって人々の関係に序列が存在する状況を序列主義と呼ぶことにする。

## 3. ボルネオにおける「起源」と「序列」概観

本節では、ボルネオにおけるイバン人たちのリーダーシップと比較するために、現在までに先行研究が存在するカヤン人、クニャ人、マロー人、スラコ・ダヤック人やビダユ人たちの先行研究を整理・分析する。先行研究の整理・分析を通じて、ボルネオの人々の間には広く序列

主義が作用していることを指摘する。<sup>2)</sup> 本稿では、カヤン人、クニャ人およびマロー人を「中央ボルネオの人々」として扱う [Rousseau 1990].

イバン人たちよりも内陸の中央ボルネオに暮らす人々の多くは階層社会に分類されてきた。中央ボルネオの多くの人々の間では貴族、平民、奴隷の階層があるとされる [Rousseau 1990: 164-170].

中央ボルネオの貴族たちの権威は、起源の地、神話的人物や開拓者などの起源からの連続性によって正当化される。つまり、貴族としての優越性を主張するためには「貴族であることの起源」を示さなければならない [Rousseau 1990: 171]. そのため、貴族たちは長大な系譜や移住史に関する知識などによって、神話的世界や起源の地からの連続性を示すことができる [Rousseau 1990: 184; Hose and McDougall 1912: 10, 138]. たとえば、サラワクのカヤン人やクニャ人たちはボルネオ中部のアポ・カヤンから移住したという口承史が知られており、アポ・カヤンを「起源の地」とみなしている。カヤン人やクニャ人の貴族たちはそれぞれアポ・カヤンからの移住の説話や移住した場所の記憶を保持している [Rousseau 1990: 69-70; Sagan 1989: 133; cf. Rousseau 1990: 116]. また、貴族たちはさまざまな神話的人物の子孫であるとされ、各々は神話的世界からの系譜関係を辿ることができる。他方で、平民や奴隷たちはこのような系譜的連続性を欠いており「起源」からの系譜的連続性を示すことができない。

「起源」からの系譜的關係をもつ中央ボルネオの貴族たちは、村落の外の者と縁組する傾向があり、ときに民族境界を越えた婚姻連帯によって結び付いている。貴族たちの間の序列においても、「起源」からの近接性の主張は重要な役割を果たす。たとえば、バルイ川流域のカヤン人の中では、「起源の貴族」(*maren asen*) と呼ばれるディアン (Dian) という神話的人物からの系譜を引くものは他の貴族よりも優位であるとされる [Rousseau 1990: 165]. ただし、他の神話的人物からの系譜的連続性を主張する者もあり、さまざまな「起源」と系譜の辿り方がある [Okushima 2006: 97; Rousseau 1990: 165]. 特に、大村落の貴族は小村落の貴族とその祖先を見下し貶す傾向にあるという [Rousseau 1979: 227]. マロー人たちの貴族の間でも特定の祖先からのより直接的な連続性をもつ者は「最高位の貴族」(*samagat tutu*) として首長の地位に就く [King 1985: 96].

中央ボルネオの人々の間では、貴族と平民や奴隷との関係はさまざまな隠喩を用いて表現される。たとえば、カヤン人たちの首長は「家の所有者」(*hipuy uma*) や「家の祖先/家の根幹」(*ipun uma/pu'un uma*) と呼ばれる [Leach 1950: 76; Okushima 2006: 117]. また、平民

2) 多くの研究では、カヤン人、クニャ人やマロー人などは貴族・平民・奴隷の階層をもつ階層社会、イバン人、ビダユ人やスラコ・ダヤック人などは階層のない平等社会に二分されてきた [cf. Rousseau 1990]. 両者の大きな差異は、一部の貴族層が農耕において平民層や奴隷層に使役労働をさせる強制力があり、また交易活動を独占することである。しかし、本稿ではこの差異が何に起因しているかに立ち入ることは出来ない。本稿の目的は「起源」と「序列」概念を導入して比較的視点から分析することにある。

や奴隷にとって首長は、「我々の父であり母」(*taman, binan kame*)である [Rousseau 1998: 17]. マロー人たちの間でも、平民や奴隷は貴族を「祖父母」や「父母」と呼び、貴族は平民や奴隷を「我々の子ども」と呼ぶ関係にある。さらに複数のロングハウスを統括するようなマロー人の大首長は「土地の母」(*indu' banua*)と呼ばれる [King 1985: 198]. 「起源」に近接する貴族たちは、村落の「父母」として慣習法や儀礼を管轄し村落を宗教的・呪術的に庇護する役割を担う。

内陸部の人々の間では村落を超えた地域的な範囲においても序列が作用している。たとえば、バラム川流域では、土地の先住者は、「根幹の人々」(*lepo' pu'un*)や「根元の人々」(*lepo umbo*)と呼ばれ自らの優越性を主張する [Rousseau 1990: 64; Metcalf 2009: 191]. クニヤ人のサブ・グループに分類されるバラム川流域のブラワン人たちは土地の先住者であり「根幹の人々」と呼ばれる人々である。ブラワン人たちは、周辺地域のクニヤ人に対して自らの優位性を主張し貴族としての扱いを求める [Metcalf 1976: 89]. また、マロー人たちの間においても起源の地に関する歴史的認識には差異があり互いの優劣関係の正当化の基準となる [King 1985: 35].

中央ボルネオの人々の間では、さまざまな起源からの連続性がリーダーシップの正当化として重要であったと考えられる。他方で、ビダユ人やスラコ・ダヤック人などの沿岸部に暮らす人々の多くは階層をもたない平等社会であると分類されてきた。リーダーの権威は限られているものの、このような人々の間にも序列関係がみられる。

ビダユ人やスラコ・ダヤック人の村落はいくつかのロングハウスの集合から形成され、各ロングハウスにはロングハウス長が存在する。これらの人々の間では理論的には誰もがロングハウス長になることが可能であった。しかし、ビダユ人たちの多くの者は系譜的知識が欠如している一方で、ロングハウス内には創始者より以前からの長大な系譜的な連続性をもち比較的広大な土地の権利をもつ者たちがいる [Geddes 1954: 60]. そして、ロングハウスはこのような者たちを軸として互いに親族関係が結ばれている [Geddes 1954: 17]. 少なくともビダユ人のロングハウスには広大な土地をもち彼らを中心に村落の婚姻関係が結ばれるような、中核集団が存在することが指摘出来る。スラコ・ダヤック人たちのロングハウスにおいても、ロングハウスの創始者からの系譜を引く中核集団のような集団が存在し、その中でもロングハウス長はロングハウスの中における先住者の世帯の男性が就任した [Schneider 1974: 124-125].

現在までの資料では、村落レベルのリーダーシップに関しては不明な点が多い。ビダユ人たちの間では、村落のリーダーには村落を率いる知識や能力が必要であったものの、実際にはリーダーシップは一部の近親者に優先権が与えられる傾向にあった [Geddes 1954: 49].<sup>3)</sup> ギデ

3) シラトーは安定的にリーダーを輩出する特定の出自集団は半貴族化していただろうと述べている [Sellato 2002: 72].

スの調査した村落では村落の創始者かつ中核集団の中からリーダーが選ばれている [Geddes 1954: 11, 49]. また, スラコ・ダヤック人たちの村落では, 開拓者からの直接的な系譜を引く子孫たちが村落において支配的な地位を保っている [Schneider 1974: 204]. 村落レベルでは有力ロングハウスの支配的な中核集団が影響力をもっていたと考えられる.

ビダユ人やスラコ・ダヤック人たちは, 戦争に従事することがほとんどなかったため地域的リーダーシップは台頭しえなかった. ただし, ビダユ人は複数の村落がゆるやかに集合してひとつの「部族」の単位を形成する. この部族の単位は共通の起源, 利害関係や祖霊を認識している集団である [Geddes 1954: 10; Leach 1950: 66].<sup>4)</sup> 複数の村落から構成される部族内の関係においては, 親村の長は枝村の長に政治的に優越するといったような序列関係があったと考えられる [Leach 1950: 67, 81].

確かに, ビダユ人やスラコ・ダヤック人たちの間には階層は存在しない. ただし, 村落の開拓者から近接する者たちの間でのリーダーシップの継承が半ば当然視されるような状況があったと考えられ, 開拓者により近接する者たちが優位に立つ状況があることは指摘できる.

ボルネオでは, 広く土地の開祖や先住者が村落やそれを超える領域において影響力を行使していることが分かる. 現在まで階層社会に分類されてきた人々の間では, さまざまな「起源」からの近接性に基づく序列が強く作用している状況があったことが指摘出来る. 平等主義社会であると分類されてきた人々の間でも, 開拓者などの「起源」から近接する一部の人々の有力者が存在することが推察できる. このようにボルネオでは起源の地, 神話的世界や開拓者などの「起源」から近接するものが序列において優越する状況が広範にみられる. そして, それらの者は多くの場合, 土地の先住者や開祖などからの連続性をもつ. 他方で, イバン人たちのリーダーシップは以下にみるような諸点で異なっている.

#### 4. 先行研究におけるイバン人のリーダーシップ

##### 4.1 イバン人のリーダーシップに関する議論

多くの先行研究ではイバン人たちは極めて競争的かつ平等主義的な人々であるとみなされてきた. イバン人のリーダーシップを考察するさいに重要なのが, イバン社会が平等主義的な社会か, あるいは階層性がみとめられるかという議論である. イバン社会が平等社会か否かに関しては論争が繰り広げられた. ここでは, フリーマン, ルソーおよびセイザーの議論を取り上げその論争を, リーダーシップの議論に焦点をあてつつ概観する [Freeman 1961, 1970, 1981; Rousseau 1980; Sather 2006a].

フリーマンはバレー川流域のイバン人の調査をおこない, イバン社会がキンドレッドを基盤

4) リーチのいう「部族」とは, ギデスの記述における村落「集合体」(complex) のことであると考えられる [Geddes 1954: 10].

とした平等主義的な社会であることを指摘した。双方社会であるイバン社会には、リネージや氏族が存在しない。その代わりにイバン社会には双方向的に広がるキンドレッド網がはりめぐらされており、イバン人たちはこのキンドレッドを基盤として、ロングハウス、移住集団や出稼ぎ集団などさまざまな集団を形成する。そして、イバン人たちが多い時には数千の大規模戦闘集団を組織するさいにはこのキンドレッド網の連鎖によって集団を組織していたことを指摘する [Freeman 1961: 213-214]。このキンドレッドは互いに平等な関係で結ばれている。<sup>5)</sup> 誰であれ集団を率いるに足る実力と功績さえあればリーダーになることができたため、各々のイバン人たちはリーダーシップを求めて互いに激しく競いあっていたのである。以下、本稿では誰でもあっても自身の実力によってリーダーシップの獲得が正当化される状況を平等主義と呼ぶ。

フリーマンの議論に対し、ルソーは、イバン人たちが必ずしも平等主義的であるわけではなく、ロングハウスやそれを超える地域的なリーダーシップが一部の近親者の間で安定的に継承されていたことを指摘する [Rousseau 1980].<sup>6)</sup> そして、戦争における奴隷や首級の獲得においてリーダーに優先権があることや威信を求めて競い合う性向は継承されるため、一部のリーダー層は安定的に再生産されることを指摘した。また、かつてイバン人たちの間には、戦争捕虜や借金奴隷などの奴隷層がいたことを指摘する。そして、平等的であるとされるイバン人たちの間には競争的にリーダーシップを獲得する「威信獲得志向集団」(prestige-seeking category)、平民 (commoners)、奴隷 (slaves) という3つの暗黙の社会的地位が存在することを指摘した。さらに、ルソーは、フリーマンの調査地は開拓地であり、サラワク王国の統制の下で開拓移住がおこなわれ、奴隷が廃止され、慣習法が成文化されたことにより、社会形成の段階でサラワク王国の影響力を強く受けたことを指摘し、開拓地では平等主義のイデオロギーが「実際よりも錯覚」(more illusory than real) してみえるのであると主張した [Rousseau 1980: 60-61]。

これに対して、フリーマンは、ルソーが参照しているのは沿岸部のマレー人たちの影響を受けているイバン人たちに関する資料であり、内陸部のイバン人のような「本来的」(pristine) なイバン人たちではないと主張する [Freeman 1981: 7]。フリーマンによれば、ロングハウス内の平等性は慣習法であるアダットによって保障されている。アダットを管理する者は「家の根幹」(*pun rumah*) と呼ばれる者であり、特別な護符とト占の技能をもっている者であれば誰でも家の根幹になることが可能である。追従者も、どの家の根幹につき従うかは各々の選択に依っており自由である。そのため、家の根幹にロングハウスを率いる能力が不足していると判断すれば当該のロングハウスから離別することも可能である。また、誰でもあれ富と戦闘を率

5) キンドレッドだけではなく大規模な勲功祭宴における互酬性に着目した研究として上杉がある [上杉 1986]。

6) プリングルもフリーマンがイバン人たちの平等主義を過度に強調していることを指摘している [Pringle 1970: 28]。



いる実力さえあれば、大規模な戦闘集団を率いるような地域的リーダーになることができた。そして、このような流動的なリーダーシップのあり方こそが伝統的なイバン人たちのリーダーシップであると反論した [Freeman 1981: 34].

その後、サリバス川流域のイバン人の調査をおこなったセイザーはイバン人の平等性に関する論争の総括をおこなっている [Sather 2006a]. セイザーはイバン人の平等性を議論するうえで、経済的物質的な側面の「実質的平等性／不平等性」(equality/inequality) と「文化的・イデオロギー的な平等性／階層性」(egality/hierarchy) の概念的区別の必要性を主張する。「実質的平等性／不平等性」に関しては、イバン人たちの間では土地の耕作面積の差異によって実質的な不平等性が存在し、特に土地が希少な長期定住地においては移住が困難であることから、実質的な不平等性が恒常化していることを指摘する [cf. Murray 1981]. そして、セイザーはこのような「実質的不平等性」がどのようにイバン人たちの間で認知的に解消されるのかを文化的な観点から説明することで、イバン社会にみられる「平等性」(egality) と「階層性」(hierarchy) を「内的に一貫した方法」(an internally coherent way) で統合することを試みる。

セイザーは「文化的・イデオロギー的な平等性／階層性」が発現する領域として、「ロングハウス内／外」を区別する。そして、「ロングハウス内」の関係性はフリーマンの主張するように平等であるとする。他方で、階層性の端緒となる戦闘や交易の功績は「ロングハウス外」の活動からもたらされる。「ロングハウス外」からもちこまれる功績は、「ロングハウス外」の人々も参加する葬送儀礼 (*gawai amat*) におけるその時々席順によって社会的地位として変換される。しかし、死とともに社会的地位はあの世へと転移されるため、次世代の者たちは互いに平等な者として生まれる。イバン社会の平等性とは生まれた時の初期条件であり、功績を積んでいく過程でそれぞれが功績に応じた社会的地位を得ていくのであると主張した [Sather 2006a: 100-103].<sup>7)</sup>

これらの議論に共通する点は「イバン社会」を内閉的体系として描こうとする本質主義的傾向である。フリーマンは、純粋なイバン社会を描くことを念頭におきイバン社会の平等主義を「本来的」「伝統的」な性質として本質化している。ルソーは、開拓地においてはサラワク王国の影響を指摘するものの、長期定住地に関する記述の方を本質化し、イバン社会を内閉的体系として描く傾向にある。さらにセイザーは、「内的に一貫した方法」という視点にも示されるとおり、イバン社会における平等と階層を内閉的体系として描き出そうとする。セイザーは、他の箇所でもイバン人の間でも長大な系譜が社会的、政治的に重要な影響をもっており、過去か

7) ルソーは、セイザーが一部の資料を参照していないことを指摘しつつ、イバン人たちは生まれながらにして平等ではなく実質的な社会的地位が存在するとの見解を述べている。また、ルソーは、セイザーがイバン人たちの平等主義を強調する傾向にあることも指摘している [Rousseau 2001].

らのリーダーシップの連続性を示す役割をもっていることを指摘している [e.g. Sather 1994a]. ただし、セイザーの議論はイバン社会を体系的に説明しようとするためこのような側面がうまく包括できていないのである [Sather 2006a]. しかし、「社会」は常に内的に一貫した体系であるとは限らず、矛盾する規範は同時に併存することの方が多い。本稿では、イバン社会を内的一貫した体系として捉えるのではなく、相互に矛盾する規範が同時併存するという「複ゲーム状況」の概念を用いつつ、イバン人のリーダーシップに関する再検討をおこなう。

#### 4.2 イバン語における「根幹」の定義

イバン人たちの間でも、「根幹」と呼ばれる人々は知られている。たとえば、ロングハウスを構成する世帯であるビレックの長は、「ビレックの根幹」(*pun bilek*) と呼ばれ、ロングハウスの宗教的安定を管理するものは家の根幹と呼ばれる。セイザーが指摘するように、イバン人たちの間でみられる「根幹」の定義は2つの異なった側面をもっている [Sather 2006a: 83-84].

イバン人の開拓地であるバレー川流域で調査をおこなったフリーマンは、「根幹」を「樹木のようなものの根幹であり、そこからあらゆる種類の活動が生じるころのもの」と定義している [Freeman 1981: 31]. たとえば、戦闘集団や移住集団の発起人は、「戦争の根幹」(*pun kayau*) や「移住の根幹」(*pun minda*) と呼ばれる。そして、戦争や移住の発起を出発点として功績を積んでいき最終的には誰であっても十分な功績を積むことで最高位のリーダーであるラジャ・ブラニまで駆け上がることができる。フリーマンは、「このように各々は、自分自身の功績の『根幹』(*pun*) でならなければならなかった」と述べている [Freeman 1981: 33]. 開拓地においては、「根幹」としての地位は、自らの実力と功績によって獲得されるべきものだったのである。

他方で、セイザーは、「根幹」を「(中略) 連続性の軌跡、つまり、家族、ロングハウス、河川の流域社会、なんであれ永続的な社会集団の中に連綿とつながれる生命の『幹』を象徴するもの」と説明している [Sather 2006a: 85]. 「根幹」とは、何らかの社会集団の連続性を象徴するものなのである。この「根幹」の定義は、「根幹」を社会集団の連続性との関連で捉えている点において周辺の人々の「根幹」の定義と類似している。

セイザーは、この「根幹」の定義の二重性をイバン人が19世紀以降に急速に拡大していった歴史的動態の反映であると指摘している。つまり、イバン人たちが「ロングハウスの外」へと功績を求めて「侵略的」(*predatory*) に拡張していく中で、有力リーダーを輩出していった歴史を反映しているという [Sather 2006a: 83-84, 95-96]. 確かに、セイザーの指摘するとおり「根幹」の定義の二重性は歴史的過程で生じたものである。ただし、このような単純化したイバン人の拡大の説明は、既に指摘したような内閉的なイバン社会を前提とした説明であり、歴史的経緯を十分に包括出来ていない。イバン人たちはそれぞれの地域における歴史的経緯の中で多様に変化していったはずであり、イバン人のリーダーシップに関する民族誌的記述をそ

それぞれの地域の歴史的経緯との関連で捉える必要がある。そのことによって、本質主義的な視点によらず、イバン人のリーダーシップの多様性を描くことが可能となる。

## 5. イバン人のリーダーシップ再考

### 5.1 長期定住地におけるリーダーシップ

サリバス・スクラン川流域のイバン人の戦闘は19世紀以降に拡大していった。口承伝承では18世紀後半から19世紀初頭にかけて顕著な変化がみられる。その変化とは、ブルックの上陸の2世代から4世代以前のリーダーたちが開拓移住との関連で語られるのに対して、それ以後のリーダーたちが戦争との関連で語られるようになることである [Sandin 1967: 59]。口承伝承に従うならば、イバン人たちの戦闘は18世紀後半に拡大したことになる。ターリンは、ブルネイ王国の衰退に伴って収入が低下したブルネイ王国のマレー貴族たちがイバン人を利用し襲撃を開始したと説明している。その後、1819年に創設されたシンガポールでの交易が活発化するにつれ、イバン人の海賊も比例して拡大していったのである [Tarling 1963: 119]。

1810年頃になると、西欧の文献にイバン人たちの海賊に関する記述が登場するようになる [Walker 2002: 6]。海賊を展開したのはサリバス・スクラン川流域のイバン人たちである。サリバス・スクラン川流域のイバン人たちは、時にはマレー人たちとともに、火器を搭載した戦闘船でポンティアナック、サンバス、シンカワン、ナツナ諸島、オヤヤイガンなど近隣の交易地まで襲撃を仕掛け壊滅的な被害を与えていた [Reports<sup>8)</sup> 1855: 23; St. John 1879: 164-165; Sather 1994a]。イバン人の海賊の襲撃では約200人の死者が出ることもあった。こうしたイバン人の襲撃においては首狩りがおこなわれていたが、イバン人たちは掠奪や奴隷狩りもおこなっており、金、銀、真鍮製の食器、織物や火器を掠奪し女子供を奴隷として連れ去っていた [Reports 1855: 22, 34-35]。また、陸上においてもビダユ人、マロー人、カントウ人やクトウンガウ人などの近隣の人々への襲撃をおこない、掠奪や奴隷狩りを繰り返していた [Bouman 1924: 187; Sather 1994a: 16]。当時のイバン人たちは、「陸の泥棒、海の家賊」と呼ばれるまでの掠奪集団となっていた [Tampler 1853: 74 cited in Walker 2002: 67]。

周辺の交易地や村落への襲撃に加えシンガポールに寄港する交易船も襲撃していたサリバス・スクラン川流域のイバン人たちは、比較的裕福であったと考えられる。イバン人の海賊たちは身体のいたるところに真鍮製の装飾品を身につけていたことが知られている [Keppel 1846: 221; Low 1848: 178-179; Reports 1855: 193]。また、襲撃を繰り返していたイバン人の村落には、多くの奴隷が存在しており奴隷は労働力としても重要であった [Boyle 1865: 182-183, 186; Roth 1896: 209-210]。周辺の人々から掠奪や奴隷を取奪していたイバン人たちは経

8) 本稿では、*Borneo. Reports of the Commissioners Appointed to Inquiries into certain Matters connected with the Position of Sir James Brook.* を Reports と略称する。

済的に繁栄していたことが推察される。

長期定住地での戦闘は政治経済的な重要性が高かったと考えられ、<sup>9)</sup> 戦闘に特化した領域が存在した。長期定住地では「領域の長」(*tuai menoa*) と呼ばれるリーダーが存在し、ロングハウスを超える地域的な影響力をもっていた。<sup>10)</sup> 領域の長は複数のロングハウスを統率するリーダーであり初代の領域の長には土地の開祖が就任した。その後は有力な戦闘を率いる能力があり経済的にも富裕である者から選出された。領域の長の主な役割は、領域内のロングハウスの配置を調整すること、特に領地の要所に有能な戦士を配置すること、来住者に対して土地の分配をおこない、時には暴力的に追い払うこと、戦闘船や家屋用の木材を切り出す共有地の管理、ロングハウス間の係争の仲裁などであった [Sutlive and Sutlive 2001: 1902-1903]。このような領域の長の役割は戦争と密接な関わりがあったと考えられる。<sup>11)</sup>

イバン人の海賊・襲撃の拡大の背景には、ブルネイ王国のマレー貴族との関係がある。第 1 に、激しい対立関係にあったマレー貴族たちは、側近の拡大のために奴隷が必要であった。マレー貴族は、奴隷を自衛のために利用する他にも、女性の奴隷を婚姻させることで側近を拡大することが可能であった [Walker 2002: 9]。第 2 に、マレー貴族は軍事的な力としてイバン人たちを利用して [Walker 2002]。たとえば、税を滞納するピダユ人たちへの税の取り立てのためにイバン人たちに襲撃をおこなわせていた。他方で、イバン人リーダーにとって、マレー貴族たちは火器を提供する後援者であった [Low 1848: 189]。火器の発砲音に対する恐怖はすさまじく、イバン人たちが手にする火器は僅かであっても相手を恐怖させるには十分であったろう [cf. Low 1848: 163]。また、イバン人リーダーの系譜には、「オラン・カヤ」(*Orang kaya*) や「トゥモンゴン」(*Temenggong*) などのマレー貴族の称号をもつ者が散見される [e.g. Sandin 1967: 105, 1994: 291, 293, 316]。口承伝承によると、奴隷を連れて来たイバン人リーダーたちに対して、マレー貴族が称号を与えていた [Sandin 1994: 181]。マレー貴族からの権威付けはイバン人リーダーの権威の強化のために用いられたと考えられる。

一部のイバン人リーダーたちは海賊・襲撃によって生じる威信や富を安定的に自らに集中することができたと考えられる。戦闘後、追従者は最初に狩った首級をリーダーに差し出し、戦闘において複数の首級が獲得された場合は、首級はリーダーたちの間で分配された [Roth 1896: 159]。イバン人の追従者たちはリーダーに奴隷・首級を差し出すことで、リーダーたち

---

9) ただし、農閑期にのみ海賊に出かけていたとの証言もあり戦争のみで生計をたてられる状況にはなかったと考えられる [Reports 1855: 110]。

10) 他方で、筆者の知る限り、開拓地の記述には「領域の長」に関する記述はみられない。「領域の長」の不在は、開拓地における広域的かつ安定的なリーダーシップの不在を示していると考えられる。

11) このように戦争に特化した政体としては白檀交易によって入手した火器によって爆発的に拡大したティモール島南岸のナブアサ首長国がある。土地、資源および人口の管理を通じてリーダーシップを保持していた。また、リーダーは、来住者への土地の割り当て、有能な戦士の要所への配置などをおこなっており、イバン人の領域の長の統治との近接性が指摘できる [McWilliam 2002: 141]。

から返礼として「称号」(*ensumber*)を与えられていた [Morgan 1968: 149]。さらに、リーダーは戦闘によって得られた略奪品の分配においてより多くの取り分を主張できた [Sandin 1967: 78; Reports 1855: 34]。リーダーたちは戦闘によってもたらされる威信や富を安定的に掌握することができたのである。一部の有力者に富と名誉が集中していたことは想像に難くない。

長期定住地のイバン人リーダーに特徴的なのは、中央ボルネオの貴族にみられるような系譜である。長期定住地のイバン人たちの間では、30 世代以上も遡れる長大な系譜が知られている [Sandin 1967, 1994]。系譜の中には戦争神であり至高神であるシンガラ・ブロンや、土地神であるプラン・ガナなどの神々にまで到達するものが存在する。ただし、すべてのイバン人たちが神話的世界まで連なる系譜を保持しているのではなく、一部のイバン人たちが主張するものであり、長大な系譜をもつ者には大きな威信が与えられた [Leach 1950: 72]。このような地域における中心的系譜は、「系譜の根幹」(*pun tusut/batang tusut*)と呼ばれる [Sather 1994a, 2006b]。セイザーは、「サリバスなどの、長期定住地において、系譜は社会的、政治的にかかなりの重要性をもっており、個々人の関係のみでなく家族やロングハウスの関係にまで影響をもっていた」と述べている [Sather 1994a: 50]。特に、系譜は過去の開拓移住における先住性、リーダーシップの連続性そして社会的地位の主張の根拠として用いられた [Sather 1994a: 52, 1994b: 271]。しかし、系譜関係が双方向的に広がるイバン人たちの間では、系譜的關係さえ辿ることができれば誰でも系譜の根幹を使うことができた [Sather 1994a: 52]。長期定住地では、神々などからの系譜的連続性が、権威や威信の正当化としての根拠となるような規範が作用していたと考えられる。

他方で、従来から指摘されているように頻りに戦闘に従事していたイバン人の中には自らの実力によって台頭する者もいただろうが、実力のみによってリーダーシップを獲得できる可能性は限られていた。少なくともサリバス川流域では、新たなるリーダーは前任者の近親者から選ばれる傾向にあった。そのため、前任者との系譜関係のない実力者にとっては前任者と縁組を結ぶことはリーダーシップを獲得するうえで極めて重要であった [三浦 1980]。また、近隣の長期定住地のイバン人たちの間では出生に対して大きな誇りをもっており、劣位の者がより高位の娘と結婚することは困難であったという記録がある [St. John 1862: 52]。そうであるならば、前任者の近親者と婚姻関係を結ぶには戦闘や交易における実力者として認められる必要があったであろう。また、リーダーシップを獲得できなかったとしても開拓者の子孫は依然として崇敬の対象であり、その時々首長の近親者たちと婚姻関係を結ぶこともあった [Sandin 1967: 32]。このことは、開拓者の影響力を保つ意味もあったと考えられる。

長期定住地のリーダーたちの間では、自らの近親者に威信や富を集約させようとする傾向があったことが指摘出来る。また、それらの者たちの中には神話的世界からの系譜的連続性や祖先からの連続性によって自らの権威の正当性を主張する者たちが存在した。このようなリー

ダーシップは、ボルネオにおける周辺地域の人々の序列主義と近似している。他方で、戦闘・交易などによって実力を認められた者は、婚姻により系譜をつなぐことで、自らの系譜を根幹の系譜にすることも可能であった。つまり、長期定住地のイバン人たちの間では序列主義と平等主義のどちらも同時並行的に作用しており、一枚岩的には捉えることの出来ない錯綜した状況であったと考えられる。

## 5.2 長期定住地からのイバン人たちの拡大

19 世紀初頭より、イバン人たちは長期定住地より北部へと急速に拡大していく。フリーマンは、「この驚くべき移住の背景にある主要な動機は、新たなる一次林を開拓しようという熱望であり、豊作に恵まれるとすぐに土地を捨て新鮮な土地へと移る傾向」であると主張した [Freeman 1970: 76]。また、モーガンはイバン人の拡大を、「彼らの基底的価値観、つまり、彼らの社会的な理念から派生」していると述べ、拡大の要因を「文化的」側面から理解する [Morgan 1968: 153]。モーガンは、イバン人たちの戦闘、開拓および豊作による功績の称揚と一次林への偏好という文化的特性が拡大をもたらしたと述べている。ヴァイダは拡大には首狩りが伴っていたことを指摘し、長期定住地の人口圧の高まりに直面したイバン人たちは、先住者を追い払うことで耕作が容易な二次林を獲得しつつ拡大していったことを指摘した [Vayda 1969]。セイザーは、19 世紀初頭にイバン人たちが「ロングハウス外」へと、首級、奴隷や土地などの功績を求めて「侵略的」に拡大していったと述べている [Sather 2006a: 95-96]。

このような拡大の議論においては、イバン人の拡大の外的要因を過度に捨象して、生業形態や文化的要因などの内的要因を強調する傾向にある。しかし、イバン人の拡大の要因は複数であるばかりでなく、時期や地域によっても相当程度異なっており単純にひとつの要因に還元することはできない。たとえば、近隣の交易地に海賊を展開しており地域的なリーダーシップが確立されていたサリバス・スクラン川流域のイバン人の移住は、1840 年頃から開始される。他方で、海賊行為に従事せず安定的なリーダーシップが不在であったルパール川上流域のイバン人は 1800 年頃から開拓移住を開始しており、移動の要因は相当程度異なっていたはずであろう。また、サリバス・スクラン川流域のような長期定住地では長期的に定住して焼畑が営まれている。イバン人たちの焼畑には開拓期から定住期への移行期間が存在し、フリーマンやモーガンが想定するように、すべてのイバン人たちは常に開拓移住をおこなう必要があったわけではないのである [Cramb 2007: 80-96]。

長期定住地からの移住は時期と地域によって大きく 2 つに分けることができる。サリバス・スクラン川流域からの移住は 1840 年頃から開始される。この移住の大きな要因としては 1843 年と 1844 年の海賊掃討作戦や 1849 年の討伐作戦が挙げられる [Walker 2002: 93]。このような掃討作戦や討伐作戦ではサラワク王国の権威に服する者もいたが、王国の統治に反抗する者たちは王国の影響の届かない北部へと移住していった。サラワク王国成立以降におこな

われた移住には、その統治からの逃避という側面もあったのである。

他方で、1800年頃から始められた移住は、ルパール川上流域から開始される。そして、後述のバレー川流域のイバン人たちの多くは、ルパール川上流から移住したイバン人たちである [Freeman 1970: 132]。この移住の要因は現在にいたるまで不明である。移住が開始される時期は沿岸部でサリバス・スクラン川流域のイバン人たちが海賊を開始するのと同時期である。また、サラワク王国成立以前から、ルパール川では上流と下流のイバン人たちの間で対立があったことが知られている [Pringle 1970: 214]。ルパール川上流域からルジャン川への移住の要因としては、より沿岸部のイバン人たちから押し出されるようにして移住した側面もあると推察できる。

ルパール川上流域からルジャン川に進出したイバン人たちは、さらにルジャン川上流へと移住を展開する。ルジャン川上流への移住の大きな要因は、サラワク王国によるルジャン川上流に居住するカヤン人たちの討伐である。1863年、サラワク王国はイバン人を動員してルジャン川上流域のカヤン人に対する討伐作戦を展開する。この討伐作戦によりルジャン川流域のイバン人たちとカヤン人たちの勢力の均衡が崩れたことにより、1870年頃からイバン人たちはバレー川流域まで進出していくことになる [内堀 1987; Freeman 1970: 134]。このように、イバン人の拡大の要因は外的影響が極めて大きかったといえる。

### 5.3 開拓地におけるリーダーシップ

バレー川流域へと拡大していったイバン人たちは、フリーマンが主張したように平等主義への傾きが顕著である。先述したように、以下では、開拓地のイバン人たちが平等主義へと傾いていった要因について考察する。

かつて人類学者の間では、バレー川流域は「伝統的」なイバン社会が残存している地域として認識されてきた。リーチは、もっとも伝統的な生活を保持しているという理由によりバレー川流域のイバン人の調査を推奨している [Leach 1950: 27]。その後、バレー川流域で調査をおこなったフリーマンも、バレー川流域は「外界の影響をほとんど受けていない」状態であり、自身が描くのは「サラワクの白人王の寛容なる政策のために、現代世界まで無傷のまま生き延びたイバン人たちの慣習」であると述べている [Freeman 1962: 16].<sup>12)</sup>

しかし、バレー川流域は歴史から隔離された地域ではなく、むしろ外界の影響を大きく被ってきた地域である。バレー川の本流のルジャン川流域は、東南アジア有数のサゴの生産地だった。西欧の繊維産業の隆盛に伴う工業用スターチの需要高騰によって交易が活性化しており、サラワク王国の影響が及ぶ以前からブルネイ王国内有数の交易地であった [Ooi 1995; Walker 2002]。また、ルジャン川の上流に居住していたカヤン人たちが河口部のマレー人たちと婚

12) 他方で、フリーマンはマレー人との接触の多かった長期定住地を伝統的イバン社会ではないとみなす [Freeman 1981]。

姻連帯を結んでいたことから、ルジャン川一帯に交易網が広がっていたことを推察できる [Pringle 1970: 113]。サラワク王国が同地を獲得して以降は、サラワク王国は、カノウィット (1849 年)、シブ (1862 年)、カピット (1874 年) などのルジャン川の要所に駐在所を建設していく [Sutlive and Sutlive 2001: 574-576]。駐在所の建設後は徐々に交易環境が整い、河川交易は促進されていった。特に、ルジャン川流域に広がる広大な一次林は潤沢な林産物を提供し、林産物交易はサゴに次いで重要な位置を占めるようになる。ルジャン川流域の交易活動の発展速度はまさに驚異的であった [Sarawak Gazette<sup>13)</sup> 1901: 60]。1910 年までには、林産物交易はサラワク王国の収支の三分の一を占めるまでに成長していく [Ooi 1995: 86]。広大な一次林に囲まれたイバン人たちは、ゴム樹脂などの林産物を求めて移動を繰り返していった。ルジャン川流域に拡大したイバン人の特徴のひとつは一部の狩猟採集民との「共生的」関係を結んだことである [Freeman 1970: 134]。農閑期には林産物採集に出掛けているために、ロングハウスは打ち捨てられたかのような状態になっていた [SG 1906: 342, 1908: 65]。イバン人たちは林産物を求めて移住を繰り返したと考えられる。

林産物交易の進展は、イバン人たちだけではなく内陸部からも多くの人々を引きつけた。特に、イバン人が移住してくる時期には、カヤン人たちも内陸から移住してきており、双方の間で戦闘が繰り返された。イバン人による戦闘はその戦闘集団の巨大さに注目が集まるが多かった。しかし、開拓地で交わされた戦闘は沿岸部での戦闘とは時代的、地域的な背景が異なっていたと考えられる。バレー川流域には火器を提供し奴隷を買い取るようなマレー貴族は存在しなかった。また、バレー川流域に進出した頃にはサラワク王国の影響力が確立しており海賊をおこなうことは不可能であった。バレー川流域のイバン人たちの戦闘は、海賊・襲撃をおこない「陸の泥棒・海の手」と呼ばれたサリバス・スクラン川流域のイバン人の戦闘とは異なっていたらう。

フリーマンは、バレー川流域のイバン人たちは数百人から時には数千の兵力でもって周辺の人々に繰り返し襲撃を加えたと述べている [Freeman 1961: 213]。確かに、開拓地では数百人単位の大規模戦闘集団が生まれなかったわけではないが、サラワク王国が編成した討伐隊を除けば、多くの戦闘は比較的小規模のものであった。<sup>14)</sup> た例えば、1892 年にはイバン人によって 24 人のクニヤ人が殺害されるという事件がおこった。この事件は、「深刻な衝突」として報告

13) 以下、SG と表記する。

14) 実際には、サラワク政府の主導でおこなわれた討伐を除けば、開拓地でイバン人たちが数千の規模の戦闘集団を組織したことは稀であっただらう。開拓地での大規模な戦闘としては、1903 年に 500 人のイバン人たちが 21 人の人々を殺害し 10 人の捕虜を得た事件などがある [SG 1903: 82]。また、サラワク王国とイバン人の大規模な衝突として、サリバス・スクラン川流域で交わされた「ブティン・マラウの戦い」では、2,000 人から 3,000 人の海賊たちが参加し 500 人から 700 人の死者が出ているのに対して、開拓地での最大規模の衝突である 1916 年の「ナンガ・ピラの戦い」のイバン人たちの勢力は約 400 人で死者は約 200 人であった [Pringle 1970: 83, 262; SG 1916: 78]。このように両地域での戦闘の規模には大きな差異がある。



されている [SG 1892: 40]. また, 1907年の46人のイバン人たちが15人のカヤン人の女子供を殺害した事件 [SG 1907: 149] や, 1913年の80人のイバン人たちがカヤン人のロングハウスを襲撃した事件などがある [SG 1913: 22]. 1915年のサラワク王国の討伐の理由として挙げられているイバン人の襲撃は同年3月と4月の2ヵ月間におこなわれた7回の襲撃であり死者は21人である [SG 1915: 137]. このような戦闘の要因は土地紛争, 林産物採集地における争いや過去の親族の殺害の報復などであったと考えられる. 小規模な戦闘が頻発する状況においては大群を統率するリーダーは出現しにくく, 誰であれ実力さえあれば戦闘リーダーとして名乗りを挙げることが容易な状況であり, 安定的なリーダーシップは定着しなかったと推察される. サラワク王国は, 誰がリーダーなのかがはっきりしないため間接統治が極めて困難であった. リーダーがいたとしてもリーダーの影響力は限られており, 若者たちが勝手に事件を起こしてしまうような状況であった [SG 1913: 199].

サラワク王国は1880年頃より討伐や強制移住などによりバレー川流域への介入を強めており, バレー川流域のイバン人たちは開拓移住の段階からサラワク王国の統治の影響を受けていた. イバン人たちは, 「森を食べる者」と揶揄されたように短期的に一次林を耕作した後, 新たな一次林を開拓する粗放的な焼畑をいとなんでいるといわれてきた. しかし, ワドレーは, このイバン人の粗放的な生業のあり方は, 頻発する戦闘, サラワク王国の討伐と強制移住政策の影響によって生じた生業形態であるとしている. 既に述べたように, バレー川流域ではイバン人やカヤン人などとの間で戦闘が頻発していた. また, イバン人たちは頻繁に周囲の人々に襲撃をしかけており, サラワク王国はイバン人に対する討伐作戦を繰り返しておこなっていた.<sup>15)</sup> さらに, サラワク王国はバレー川流域で戦闘と拡大を繰り返すイバン人たちを管理下に置くべく駐在所近辺へ強制移住をさせている. このように頻繁な移動を強いられる不安定な状況下では, 二次林を耕作するという長期的定住を志向した生業形態をとることは困難であり, イバン人たちは一次林を可能な限り連続的に耕作した後, 新たな一次林を開拓するといった短期的な生業形態によって不安定な地域的状况に一時的に適応していったと考えられる [Wadley 2007: 123-124].

バレー川流域のイバン人たちは外界の影響から遮断された人々ではなく, むしろ, 歴史的に交易やサラワク王国の統治の影響を大きく受けていたことが指摘出来る. バレー川流域のイバン人たちは, 林産物交易の拡大, 頻発する戦闘と討伐作戦, 移住政策の影響により極めて流動性が高い人々であり, 強力で安定的なリーダーシップは出現しえなかった. このような不安定な状況下では, 誰であれ自身の実力によって台頭することができただろう. 開拓地では, さま

---

15) サラワク政府の影響から逃れようとするイバン人たちは, サラワク政府の影響力の及びにくい奥地や, 時には蘭領カリマンタン側へと移住していった [SG 1915: 138, 285]. また, イバン人たちのサラワク王国からの逃避には, 課税から逃れる目的もあった [Wadley 2007: 116].

ざまな「起源」からの近接性よりも、自分自身の実力によってリーダーシップが正当化されるような規範があり、「各々が自分自身の功績の『根幹』でなければならなかった」のであると考えられる。

## 6. お わ り に

本稿では、イバン人を中心にボルネオの民族誌の整理・分析をおこなってきた。まず、イバン人の周辺に居住するボルネオの人々の先行研究を整理・分析する中で、序列主義的なリーダーシップが作用している状況が広がっていることを指摘した。序列主義的なリーダーシップと比較すると、イバン人たちの暴力的リーダーシップは特異的である。しかし、イバン人たちのリーダーシップも決して一枚岩的に記述できる状況ではなかった。

本稿では、先行研究の検討を通じてイバン人たちを一枚岩的に語ろうとする本質主義的傾向にあることを指摘した。多くの先行研究では、「イバン社会」を体系的に説明しようとするがために、体系と一致しない記述や歴史的経緯を取りこぼしてしまう傾向にあったといえるだろう。たとえば、既に見たように、セイザーはイバン人のリーダーシップを、功績を求めて競い合った結果、序列化されるものの、死とともに過去の功績は無効化されるため、次世代では初期化されるというサイクルとして説明する。また、イバン人の拡大に関しては、功績を求めて激しく競い合うイバン人は、「ロングハウス外」への功績を求めて、「侵略的」に拡大した結果だと説明している。しかし、系譜によって過去からのリーダーシップを主張するイバン人リーダーたちが平等性の初期化を甘受していたとも、統治から逃避していったイバン人たちが、「ロングハウス外」への功績を求めて「侵略的」に拡大していったとも考えにくい。

イバン人たちはボルネオ西部に広範に住んでいることに加え、それぞれの地域が経験した歴史的経緯も異なっている。そうであるならば、イバン社会を体系として描くよりは、それぞれの歴史的経緯とそれぞれの地域のリーダーシップの関係に焦点をあてる方が、より多くの資料や先行研究の記述を包含できるはずである。本稿では、複ゲーム状況という概念を用いてイバン人のリーダーシップに関する一次資料や先行研究を整理・分析した。マレー人の影響下で海賊・襲撃を繰り返したイバン人の間では、神話の世界から連なる系譜的連続性によってリーダーシップを主張する人々がいる一方、自らの実力によって台頭することもできるような状況であったと考えられる。他方で、その外縁部であるバレー川流域のイバン人たちの間では、交易の拡大、植民地政府による討伐や移住政策などの歴史的経緯に大きく影響された結果、平等主義的な側面が強く作用していた。このように、「イバン人」といわれてきた人々の間では、複数の規範が同時並行的に作用していたと捉えることで、多様なイバン人のリーダーシップの側面を捉えることが出来る。今後は、いずれかの地域のイバン人を「伝統的」「本来的」とすることなく、より広範な民族誌と歴史資料を突き合わせるにより精緻な議論を展開する必

要があるだろう。そのことによって、広範な地域に広がるイバン人たちの多様性を捉えることが出来る。

フリーマンがいうように、バレー川流域のイバン人たちを「伝統的」「本来的」なイバン社会とみなすならば、イバン人はもともと特異な人々であったということになる。しかし、他の東南アジア島嶼部では、イバン人のような暴力的リーダーシップは歴史的経緯の中で特異的に台頭しており、他の東南アジア島嶼部におけるリーダーシップと多くの共通点を見出すことができる [杉島 2014b: 356-358]。たとえば、中部スラウェシのサダン・トラジャは、南部には階層的な村落が存在するのに対して、北部地域のリーダーシップは富に基づく傾向があったという [山下 1988: 20-21]。北部地域は奴隷交易によって火器を得たビッグマン的な戦争首長たちが暴力的に領土を拡大していったという歴史的経緯がある [山下 1988: 56-57; Volkman 1985: 26-27]。このような地理的分布は、ボルネオ西部の状況と比較可能であるだろう。ただし、本稿で指摘したように、暴力的リーダーシップの伸長したイバン人たちも、一枚岩で描くことの出来るような状況ではなかった。序列主義と平等主義が交錯していたイバン人たちの状況は、サダン・トラジャの戦争首長たちが拡大していく過程でも生じた可能性もある。また、イバン人の拡大には、サラワク王国の成立が大きく関係しており、植民地政府と暴力的リーダーシップをもつ人々の相互交渉にも着目して、さらなる比較研究をおこなっていく必要がある。本稿は、依然として予備的考察にとどまるものの、豊富な一次資料や先行研究が存在するイバン人たちの研究は、比較研究に多くの知見を提供できるはずである。

#### 引用文献

- Borneo. *Reports of the Commissioners Appointed to Inquiries into certain Matters connected with the Position of Sir James Brook*. 1855. London: Harrison and Sons.
- Bouman, M. A. 1924. Ethnografische Aanteekeningen omtrent de Gouvernementslanden in de Boven-Kapoeas, Westerafdeeling van Borneo, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 64: 173-195.
- Boyle, Frederick. 1865. *Adventures among the Dyak of Borneo*. London: Hurst and Blackett.
- Cramb, R. A. 2007. *Land and Longhouse: Agrarian Transformations in the Uplands of Sarawak*. Copenhagen: Nias Press.
- Fox, James J. 1995. Origin Structures and Systems of Precedence in the Comparative Study of Austronesian Societies. In P. Jen-Kuei Li *et al.* eds., *Austronesian Studies Relating to Taiwan*. Taipei: Academia Sinica, pp. 27-57.
- \_\_\_\_\_. 2006a. Introduction. In James J. Fox and Clifford Sather eds., *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. Canberra: ANU E Press, pp. 1-17.
- \_\_\_\_\_. 2006b. Place and landscape in Comparative Austronesian Perspective. In James J. Fox ed., *The Poetic Power of Place: Comparative Perspectives on Austronesian Ideas of Locality*. Canberra: ANU E Press, pp. 1-21.
- Fox, James J. and Clifford Sather eds., 2006. *Origin, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian*

- Ethnography*. Canberra: ANU E Press.
- Freeman, Derek. 1961. The Family System of the Iban of Borneo. In J. Goody ed., *Social Structure in South Asia*. New York: Viking Fund Publications, pp. 65-87.
- \_\_\_\_\_. 1962. On the Concept of the Kindred, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 91(2): 192-220.
- \_\_\_\_\_. 1970. *Report on the Iban*. London: Antholone Press.
- \_\_\_\_\_. 1981. *Some Reflection on Iban Society*. Canberra: Department of Anthropology, Australia National University.
- Geddes, W. R. 1954. *The Land Dayaks of Sarawak. A Report on a Social Economic Survey of the Land Dayaks of Sarawak, Presented to the Colonial Science Research Council*. London: Her Majesty's Stationary Office.
- Hose, C. and McDougall, W. 1912. *The Pagan Tribes of Borneo, 2 vols*. London: Macmillan.
- Keppel, H. 1846. *The Expedition to Borneo of H. M. S. Dido for the Suppression of Piracy; with Extracts from the Journal of Sir James Brooke Esq. of Sarawak*. London: Chapman and Hall.
- King, Victor. 1985. *The Maloh of West Kalimantan. An Ethnographic Study of Social Inequality and Social Change among an Indonesian Borneo People*. Leiden: Brill.
- Leach, E. R. 1950. *Social Science Research in Sarawak: A Report on the Possibilities of a Social Economic Survey of Sarawak Presented to the Colonial Social Science Research Council*. London: His Majesty's Stationary Office.
- Low, H. 1848. *Sarawak, Its Inhabitants and Productions: Being Notes during a Residence in that Country with His Excellency Mr. Brooke*. London: Bentley.
- Metcalf, P. 1976. Who are the Berawan? *Oceania* 47(2): 85-105.
- \_\_\_\_\_. 2009. *The Life of Longhouse: An Archeology of Ethnicity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McWilliam, R. 2002. *Path of Origin, Gates of Life: A Study of Place and Precedence in Southwest Timor*. Leiden: KITLV Press.
- 三浦太郎. 1980. 「Iban 族のリーダーシップ継承に関する若干の考察」『歴史と構造』8: 47-50.
- Morgan, S. 1968. Iban Aggressive Expansion: Some Background Factors, *Sarawak Museum Journal* 16: 141-185.
- Murray, Tania. 1981. People on Top (Orang ka-atas): The Questions of Iban Egalitarianism, *Cambridge Anthropology* 7(1): 28-46.
- Okushima, Mika. 2006. Ethnohistory of the Kayanic Peoples in Northeast Borneo, *Borneo Research Bulletin* 37: 86-126.
- Ooi, Keart Gin. 1995. *An Economic History of Sarawak during the Period of Brooke Rule, 1841-1946*, University of Hull, Ph.D. Thesis.
- Pringle, R. 1970. *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*. Ithaca: Cornell University Press.
- Roth, H. L. 1896. *The Natives of Sarawak and British North Borneo, 2 vols*. London: Truslove & Hanson.
- Rousseau, J. 1979. Kayan Stratification, *Man* 14(2): 215-236.
- \_\_\_\_\_. 1980. Iban Inequality, *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde* 136: 52-63.
- \_\_\_\_\_. 1990. *Central Borneo: Ethnicity Identity and Social Life in a Stratified Society*. Oxford: Clarendon Press.
- \_\_\_\_\_. 1998. *Kayan Religion: Ritual Life and Religious Reform in Central Borneo*. Seattle: University of Washington Press.

- \_\_\_\_\_. 2001. Hereditary Stratification in Middle Range Societies, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 7: 117-131.
- Sagan, J. D. 1989. The Kenyah People of Sarawak, *Sarawak Museum Journal* 40: 119-141.
- Sarawak Gazette*. 1892
- \_\_\_\_\_. 1901.
- \_\_\_\_\_. 1903.
- \_\_\_\_\_. 1906.
- \_\_\_\_\_. 1907.
- \_\_\_\_\_. 1908.
- \_\_\_\_\_. 1913.
- \_\_\_\_\_. 1915.
- \_\_\_\_\_. 1916.
- Sandin, Benedict. 1967. *The Sea-Dayaks of Borneo before White Raja Rule*. London: Macmillan.
- \_\_\_\_\_. 1994. Source of Iban Traditional History, *Sarawak Museum Journal Special Monograph* 7 (67).
- Sather, Clifford. 1994a. Introduction. In Benedict Sandin ed., *Source of Iban Traditional History; the Sarawak Museum Journal Special Monograph* 7, pp. 1-78.
- \_\_\_\_\_. 1994b. Appendix. In Benedict Sandin ed., *Source of Iban Traditional History; the Sarawak Museum Journal Special Monograph* 7, pp. 268-271.
- \_\_\_\_\_. 2006a. "All Threads are White": Iban Egalitarianism Reconsidered. In James J. Fox and Clifford Sather eds., *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. Canberra: ANU E Press, pp. 73-112.
- \_\_\_\_\_. 2006b. 'Posts, Heaths and Thresholds: The Iban Longhouse as a Ritual Structure.' In James J. Fox ed., *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*. Canberra: ANU E Press, pp. 67-119.
- Sellato, Bernard. 2002. *Innermost Borneo: Studies in Dayak Cultures*. Singapore University Press.
- Schneider, W. M. 1974. *Social Organization of the Selako Dayak of Borneo*, Doctoral dissertation, University of North Carolina.
- St. John. 1862. *Life in the Forest of the Far East*. Edinburgh & London: William Blackwood & Sons.
- \_\_\_\_\_. 1879. *The life of Sir James Brooke, Rajah of Sarawak*. Edinburgh & London: William Blackwood & Sons.
- 杉島敬志. 2001. 「ポストコロニアル転回後の人類学的実践」杉島敬志編『人類学的実践の再構築』世界思想社, 1-50.
- \_\_\_\_\_. 2008. 「複ゲーム状況についてー人類学のひとつの可能な方途を考える」『社会人類学年報』34: 1-23.
- \_\_\_\_\_. 2010. 「ニューギニア高地・カラム人の動物への関係行為をめぐる複ゲーム状況」『南方文化』37: 1-21.
- \_\_\_\_\_. 2014a. 「複ゲーム状況への着目ー次世代人類学にむけて」杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学ー東南アジアからの構想と実践』風響社, 9-54.
- \_\_\_\_\_. 2014b. 「東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論」杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学ー東南アジアからの構想と実践』風響社, 331-364.
- Sutlive and Sutlive. 2001. *The Encyclopedia of Iban Studies, vol. 1-4*. Kuching: The Jugah Foundation.
- 内堀基光. 1987. 「国家と部族社会ーサラワク・イバンの経験」伊藤亜人ほか編『現代の社会人類学3 国

- 家と文明への過程』東京大学出版会, 57-82.
- 上杉富之. 1986. 「イバン族社会における集団編成のメカニズム」『社会人類学年報』12: 87-116.
- Tarling, N. 1963. *Piracy and Politics in the Malay World*. Melbourne: F. W. Cheshire.
- Vayda, P. A. 1969. The Study of the Cause of War, with Special Reference to Head-Hunting Raids in Borneo, *Ethnohistory* 16(3): 211-224.
- Volkman, T. A. 1985. *Feasts of Honor: Ritual and Change in the Toraja Highlands*. Illinois: University of Illinois Press.
- Vischer, M. P. ed. 2009. *Precedence: Social Differentiation in the Austronesian World*. Canberra: ANU E Press.
- Wadley, R. L. 2007. Slashed and Burned: War, Environment and Resource Insecurity in West Borneo during the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries, *The Journal of Royal Anthropological Institute* 13: 109-128.
- Walker, J. 2002. *Power and Prowess: The Origins of Brooke Kingship in Sarawak*. Sydney: Allen & Unwin.
- 山下晋司. 1988. 『儀礼の政治学—インドネシア・トラジャの動態的民族誌』弘文堂.